

常設展 〈2024 年 4 月 - 6 月〉 作家・作品解説

展示室 1

近江商人のたからもの

The Treasures of an Omi Merchant Family

ひね たいざん 日根 対山

和泉国日根郡（現在の大阪府泉佐野市）生まれ。幼い頃から絵を好み、地元で桃田^{えいうん}栄雲、岡田^{はんこう}半江らに絵を学んだ後、京都で儒学者であり画家、書家でもあった貫名^{ぬきな}海屋^{かいおく}に入門、学問や書画について学びました。30 歳頃からは本格的に文人画に転向、滑らかながら勢いを感じさせる筆使いの水墨山水画を得意とし、特に幕末期の京都で人気を博しました。対山は現在の東近江市永源寺付近の景勝地、越溪^{えっけい}（愛知川^{えち}）を愛したことが知られており、度々近江に滞在し作品を制作しました。滋賀県蒲生郡桜川村（現在の滋賀県東近江市^{かぼた}綺田町）を本拠地とする近江商人、野口家とも関わりが深く、弟子の^{しょうひん}小蘋は野口家に嫁いでいます。

すいぼくさんすいず 1 水墨山水図

水辺の村落を描いた一幅です。高い山がそびえ、さらに奥には黒い山容が見えています。水気のある墨の濃淡を自在に使い分けて、山肌は淡墨をやわらかく引き重ねて表わし、遠山には墨の滲みをみせ、潤いのある空気を描いています。銀箔粉^{ぎんぱく}を散らした料紙^{りょうし}を用いているとみられ、制作当初には銀色の光輝に包まれた静謐な山水図であったでしょう。書画に秀でた対山の、素材へのこだわりと墨技の妙を見ることが出来る一幅です。

ぼくちくず 2 墨竹図

急な斜面に生え出る若竹を描いています。賛文^{さんぶん}（絵と一緒に描かれる詩や文章）には雨に洗われた秋の夕暮れの景色が謳^{うた}われていますが、画では、竹の葉は黒々と潤い、奥の竹は大きくしな垂れており、地面の傾斜や雨水の重みに負けず、まっすぐに伸びようとする竹の姿を水墨で描き出しています。

3 風竹図 ふうちくず

風に吹かれたわむ竹を描いています。竹の根元には奇岩があり、その陰に、四君子※のひとつで、君子の高潔さを象徴する蘭も見えます。手前の竹は濃い墨で、奥の竹は淡墨で描くことで遠近を表現し、岩は墨の滲みにより、蘭の花弁は墨の濃淡を細やかに使い分けて描いています。対山は賛文（絵と一緒に描かれる詩や文章）に、京都東山の泉涌寺が所蔵する中国・明代後期の書画家董其昌（1555-1636）の作品にならって描いたと記しています。四君子…中国において、その姿が高潔な君子のようだと伝統的に好まれた梅、竹、蘭、菊の4種の植物のこと。

4 水墨山水図 すいぼくさんすいず

天に向けてそびえ立つ巨大な岩石が連なる、険しい山の風景を墨一色で描きます。折り重なる岩山は縦長の画面の下方から上方に向けて配され、ダイナミックな山岳風景に奥行きを与えています。画中の賛文（絵と一緒に描かれる詩や文章）によると、本作は明時代（1368-1644）末期から清時代（1616-1912）初期にかけて活躍した中国の画家、徐枋（1622-1694）の作風を模写して描いたとのこと。

5 水墨山水図 すいぼくさんすいず

切り立った岩山がまるで飛石のように、一定の間隔を空けて配されています。その岩山と岩山の間には霞がたなびき、切り立った断崖からは大きな滝が流れ落ちる、まるで空想上の世界のような幻想的な風景です。本作が収められていた箱の書付から、対山がこの作品を描くにあたり、明時代（1368-1644）の画家、張瑞図（1570-1640）を手本にしたことがわかります。

6 鍾馗図 しょうきず

豊かな髭を蓄えた鍾馗が、右手で小鬼をつかみ、左手は剣を高々と振り上げています。かすれのある墨線で軽やかに形姿をとらえる一方、鍾馗の面貌はやわらかな筆致で描かれ、淡墨による丁寧な陰影表現が繊細な立体感を見せています。墨のみで描かれていますが、金箔粉を散らした料紙を用いた画面は華やかで、邪気を払う一幅にふさわしい明るさをたたえて

います。

のぐち しょうひん 野口 小蘋

医師・松邨春岱まつむらしゆんたいの長女で、大坂生まれ。名は親ちか、字は清婉。幼少期から絵を好み、8歳で四条派の角鹿東山つねがとうざんに学びます。1865年（慶応元）、近江八幡に遊歴し売画。南画家の日根対山に師事、この頃から小蘋と号します。1871年（明治4）上京し、1877（同10）年に甲府に店を持つ蒲生郡の酒造家・野口正章のぐちまさあきらと結婚。山梨と滋賀を行き来しながら作品を描きました。1882年（同15）に再び上京し、華族女学校教授として教鞭を執る一方、皇室や宮家の御用を多く務めました。花鳥や山水を得意とし、理知的とも言える優れた画技に支えられた表現で、奥原晴湖おくはらせいこと共に明治の女流画人の双璧として活躍します。1909年（同42）に女性初の帝室技芸員となり、1915年（大正4）、大正天皇の即位にあたって行われた大嘗祭の「悠紀主基風俗歌屏風」ゆきすきふうぞくうたびょうぶにおいては、《主基地方風俗歌屏風》の竹内栖鳳と並び、《悠紀地方風俗歌屏風》を揮毫しました。娘は、小蘋に指示した小蕙しょうけい。

7 しんせんさいやくず 神仙採薬図

神仙とは、古代中国の伝承によると、不老不死で神通力を持つとされる仙人のこと。本作では鍬くわの持ち手に引っ掛けた籠かごを肩に担ぎ、書物を読みながら歩く神仙の姿が描かれます。籠の中には、現在も薬の材料として使用されるきのこの一種、靈芝れいしと思われる茶色い塊が見られます。付属の箱の書付によると、本作は蔣雲墟しょううんきょ（詳細不明）という画家を模して描かれたことが確認できます。

8 いぬはりこず 犬張子図

犬張子いぬはりこと白梅、葉牡丹はぼたんとみられる一枝を描いています。戊年であった1898（明治31）年の正月元旦に制作されました。西ヨーロッパ原産の葉牡丹は、江戸時代後期の『本草図譜』かんえん（岩崎滙園著、1828年）にも紹介されています。冬枯れの季節に彩りを添える園芸植物として明治中期以降に本格的な品種改良が始まりました。夏は緑色の葉が冬には紫色に変わる特徴を、墨と彩色の滲みを用いてやわらかに描き出しています。

9 梅竹双清図

懸崖けんがいに伸びる竹と梅を描いています。東洋絵画では古来、冬の寒さに耐える松・竹・梅の姿を高節さを表わすものとして描いてきました。江戸時代には、竹、梅の組み合わせの歳寒二雅さいかんにがも好まれています。この作品でも、岩陰の梅は枝を強く屈曲させながらも花をつけ、厳しい環境に屈しない姿です。竹や梅を墨の濃淡で描く一方、岩肌には薄く茶を、下草や苔には淡青の彩色を添え、清新でやわらかな画面を作り出しています。

10 宮女詠歌図

描かれているのは、宮廷に仕える女性の官人なでしこ。撫子や菱形などの細かな模様が目を引く打掛うちかけ姿で、髪は御垂髪おすべらかしにしています。御垂髪は、主に江戸時代から明治時代に宮廷に仕えた女性の髪型です。仕事の合間に部屋で、ほっと一息ついて和歌でも詠みしたためようとしている場面でしょうか。蒔絵まきえといわれる漆の表面を金粉で装飾した文机を前に、和歌に思いを巡らせる女性の気品ある雰囲気きほんが描き表されています。

11 美人逍遥図

逍遥しょうようとは、気の向くままにぶらぶら歩くこと。春の野を散歩している母子でしょうか。着物の裾を持ちながら少女の方を振り返る立ち姿の女性と、野に咲くすみれを座りこんで摘み集める少女。2人の背後には桃の花を咲かせた立派な木があり、春の香りが伝わってきそうです。ちなみに、少女の可愛らしいヘアスタイルは、鬢まきえの根元に毛先をまきつけたもので、稚児鬢ちごまげと言います。

12 美人観桜図

舞い散る桜の花びらに心をひかれ、そっと伸ばした手で受けようとする一人の女性。緑の松葉と桜の花の間をよく見ると、屋根瓦が描かれています。女性のいる場所は2階の座敷でしょうか。春の宴が繰り広げられているかもしれない座敷の中はやわらかくぼかされ、桜の花の様子を際立たせています。力強くまっすぐな松と、弧を描いて高く伸びる桜の対比も見どころのひとつです。

13 襖屏風縮図ふすまびょうぶしゆくず（下絵したえ）

東京に出た小蘋には、皇室からの依頼、特に女性皇族からのものが多くありました。本作は、付属の箱に「宮家 御襖御屏風縮図」とあること、また非常に可憐で華やかな草花が明るい色彩で描かれている作風から、詳細は不明ながら、女性皇族からの制作注文の図案下絵であったことが推察されます。

14 草花図山水図帯くさばなずさんすいずおび

小蘋が、娘の小蕙のために図様を手描きしたと伝わる帯です。光沢のある帯地の片面には、きんもくせい おみなえし金木犀や女郎花といった秋の草花を墨と金泥で描き、もう片方の面には、ぼんやりと遠くにかすみ霞むやわらかな山並みを墨の濃淡を生かし描いています。母から娘へと贈られた、家族のつながりを感じさせる一品です。

15 月に蝙蝠図帯地掛幅つき こうもり ず おびじかけふく

月こうもりと蝙蝠が刺繍された帯地の一部を、掛軸の形状に仕立て直したものです。夜を思わせる群青と白の横縞よこじまの地模様の上に、銀糸と金糸によって月が、黒糸によって蝙蝠が刺繍されています。月と蝙蝠のみを配したシンプルな構図だけに、すっきりとした洒脱さが際立ちます。

16 月に蝙蝠図帯地掛幅つき こうもり ず おびじかけふく（下絵したえ）

《月に蝙蝠図帯地掛幅こうもり かけふく》の帯地のデザインの下絵です。完成品の帯地とほぼ同じ構図で月と蝙蝠が描かれており、特に月がぼんやりと光を放つ様子を表すため、金と銀の顔料（絵の具）を混ぜて塗り、ぼかした表現がなされています。「此新月金と銀にてぬひ取るべし」と刺繍の指示が書かれており、完成品でもそのように仕立てられていることが確認できます。

17 秋景山水図しゅうけいさんすいず

屹立する崖の向こうに遠山を望む山中に、岩塊に抱かれるように 2 棟の家屋が建っています。背丈の高い草原に柱を立てた建物の上層は、部屋の窓の帳が開けられていて、人の気配がしています。水気を含んだ墨線に、木々の葉には淡青を重ね、山肌には茶を薄く塗り、秋風が渡る山間の風景を画き出しています。南画を得意とした小蘋の潤いのある水墨表現が

見どころです。

18 清玉有香図

岩陰に花を咲かせる芙蓉ふようと蓮を描いています。水辺の景なのでしょう、淡い緑の土手の向こうの淡青色の筆点が水面を思わせます。蓮は蕾が伸びる一方で散りかけの花があり、実を結び、葉も枯れ行く姿で、夏も終わりに近づいています。中国語では芙蓉は「蓉」の発音が「榮rong」と通じ、蓮は豊穰や子孫繁栄、あるいは清逸さが君子の象徴とされるなど、いずれも吉祥の意味を有するモチーフです。

19 日月図

太陽と月を双幅そうふく（一对）に描いています。「大典記念日月双幅」という箱書や、太陽を描いた方の賛文に記すように、1915（大正4）年11月10日から17日にかけて京都で行われた大正天皇の即位礼に際し、儀式の始まるまさにその日に、御代の弥栄を寿ぐ意味を込めて描かれました。小蘋は、大正の即位礼に際して《悠紀地方風俗歌屏風》の制作を担っており、帝室技芸員として特別な感慨を持ってこの日を迎えたのでしょうか。

20 天香国色図

水墨技法で牡丹と岩を描いています。「国色天香」とは牡丹の花が艶麗であることを言い、中国・唐時代（618-907）の詩人李正封せいほう（807-没年不明）が牡丹の美しさを詠じた詩にちなんでいます。この作品では、満開の牡丹の花を輪郭線を用いずに墨の濃淡のみで描いて、淡く透き通るような花卉が重なりあって濃い花色が現れ出るさまが豊かに表わされています。賛文に「蒲月ほげつ」とあり5月に描かれたことがわかります。

野口 小蕙

滋賀県蒲生郡桜川村（現在の滋賀県東近江市綺田町）を本拠地とする近江商人、野口正章まさあきらと小蘋しょうひんの娘として、滋賀県蒲生郡（現在の滋賀県東近江市）に生まれました。父の正章は野口家4代忠蔵ちゅうぞう（雅号は柿邨しそん）の長男、母の小蘋は幕末から明治期に活躍した画家でした。本

名は郁子。幼少期に一家で山梨県甲府市に移りますがのち東京に上京、母から手ほどきを受け絵の道に進みます。1900（明治33）年、パリ万国博覧会には小蘋とともに作品を出品。穏やかな作風で、日本美術協会展や日本画会展で活躍しました。夫は南画家の小室翠雲^{すいうん}。晩年は兵庫県西宮市に居を構えました。

21 富貴萬年図^{ふうきまんねんず}

小蕙自身の箱書によれば、幼い頃に自ら描いたものであるといい、賛文に記された年をもとに計算すると数え年16歳の歳首、すなわち年頭の作です。富貴を象徴する牡丹と若松が花瓶にいけられ、花瓶の脇には靈芝^{れいし}が置かれ、年始の作画にふさわしい吉祥の図案です。大きく貫入（模様のようなひび）が走る花瓶は青磁でしょうか。

22 西園雅集図^{せいえんがしゅうず}

緑豊かな庭園に人々が集い、絵や書の筆を取ったり、楽器を演奏したりしています。これは北宋時代（960-1127）に、蘇東坡^{そとうば}（1037-1101）や黄庭堅^{こうていけん}（1045-1105）といった当時を代表する文化人たちが、西園と呼ばれる庭園で風雅な集いを楽しんだという伝承「西園雅集^{せいえんがしゅう}」を描いたものです。この「西園雅集」は絵画の主題として人気があり、中国や日本で多くの作品が制作されました。本作は画中の書き込みから江戸時代の画家、谷文晁^{ぶんちょう}（1763-1841）の作品の模写であることが分かります。

23 野口正章小蘋像^{のぐちまさあきらしょうひんぞう}

小蕙の父母である野口正章^{まさあきら}、小蘋^{しょうひん}夫妻を描いたものです。屏風を立てた室内で火鉢の横に座る正章の傍^{かたわ}ら、小蘋は手元に広げた扇に絵を描いています。小蘋の硯や筆、絵皿、筆洗など、絵の道具が詳細に描かれていることから、実際の家庭内の情景を参考にしながら制作された可能性が考えられます。

24 雛屏風^{ひなびょうぶ}

ミニチュアサイズの屏風です。小さいながらも非常に精巧な作りで、家屋の調度品として使用される一般的なサイズの屏風と同じように、畳んだり広げたりすることが出来ます。長

寿のシンボルとされる松が描かれていることから、子供の健やかな成長を願う桃の節句などに雛人形と一緒に飾られたのかもしれませんが。

いわや いちろく 巖谷 一六

近江国水口藩（現在の滋賀県甲賀市）の侍医（主に藩主の診察を行う医師）の家に生まれました。本名は修。京都で医学を修め、自身も水口藩の侍医となりますが、維新後は貴族院議員に選出されるなど、政治家として活躍しました。一方で青年期から書を学び、書家としても大成しました。1877（明治10）年、駐日公使による招きにより中国から来日した学者で書家の楊守敬から受けた教えをもとに、「一六流」とも呼ばれる独自の書風を確立。日下部鳴鶴、中林梧竹らとともに「明治三筆」に数えられています。息子は、児童文学者の巖谷小波です。

25 へいあんによいず 平安如意図

竹に奇岩、僧侶の持つ如意に形が似ている霊芝を描いています。賛文と小蕙による箱書によれば、小蕙誕生の折に父の正章の求めに応じて巖谷一六が描き贈った作品です。賛文やモチーフからは、辛苦に耐え、何事も思う通りに、平安に、長寿であるように、という親心もうかがえます。小蕙は箱書に、これが描かれてから58年が過ぎ、一六も父母も既にこの世にはなく、自分もまた老境にあると感慨を記しています。

26 がっきず 楽器図

中国の弦楽器、月琴と桂花（金木犀）を小蕙が描き、書家の巖谷一六が賛（絵と一緒に描かれる詩や文章）を寄せています。月琴と桂花の組み合わせは、中国の思想書『淮南子』における「桂花は月の原産」という記述にちなみ、月琴を月に見立て桂花が添えられています。また中国の伝承では、月には嫦娥という仙女と呉剛という木こりが住むとされており、絵画担当の小蕙を楽器を奏でる嫦娥に見立てて月琴で表し、賛担当の一六を木を切る呉剛に見立てて桂花で表すという、二重の意味も隠されています。

27 しょうたいかきごうかん 諸大家揮毫巻

東京から京都に向かう小蘋^{しょうひん}の送別のため、親交の深い書家や画家などが作成した卷子^{かんす}（巻物）状の寄せ書きです。1873（明治6）年3月21日と日付があり、親しかった巖谷一六^{いわやいちろく}の同日の日記によると、東京の浅草寛永寺近くの談風月楼^{だんふうげつろう}に小蘋送別のため18名が参集したようです。本作は恐らくその席上でしたためられたものと考えられ、一六を含む9名の絵や書が収められています。